オットー朝期コルヴァイ修道院の写本画に於ける織物模様の研究

代表研究者　　安藤 さやか
東京藝術大学 大学院 美術研究科　専門研究員

研究要旨

初期中世以来、聖書や典礼に用いる書物では、人物像やイニシアル（装飾頭文字）を全頁大の彩飾として表すものが、典型的な装飾のひとつであった。カロリング朝時代（751–987 年）後期からオットー朝時代（919–1024 年）の各地の修道院で制作された彩飾写本では、全頁大の人物像や大型のイニシアルの背景を、羊皮紙の色のまま残す、或いは単色で塗るだけではなく、文様で埋める事例が増加する。それらの中には、動物、植物の葉や花といったモティーフを意匠化した〈文様〉を背景全面に反復した〈模様〉が、明らかにビザンティンやペルシャのテキスタイル芸術を模したものも含まれる。

こうした、テキスタイル状の背景の充填模様を備える彩飾写本の作例は、9 世紀末〜10 世紀には、ザンクト・ガレン、ライヒェナウ、トリーア、コルヴァイ等の大修道院の写字室を中心に増加する。本研究では、そのうちのひとつであるドイツ北西部のコルヴァイ修道院に由来する作例に焦点を合わせ、写本画に見られる背景の装飾模様を類型化し、絹織物や刺繍布との比較を通して、テキスタイル芸術が写本画というメディアにどのような影響を与え得たのかを追求することを試みた。

まずは、美術史学および古書体学の先行研究に基づき、コルヴァイ修道院の写字室で制作されたカロリング朝後期からオットー朝、ザーリアー朝期にかけての彩飾写本のリストアップを行った。対象とする時代をやや広めに設定したのは、制作年代が明確でない作例が多数のためである。また、制作地についても議論の余地のある作例も除外せず含めた。完本のみならず断片的に遺される写本も含め、計 105 点の写本について図版を確認し、うち 19 点に背景の充填模様を認めた。

コルヴァイ写本の充填模様を造形的特徴に従って分析すると、1）文字の隙間の充填模様、2）階層化された背景模様の 2 種に大別される。前者は組紐文様や唐草文様が中心であり、ヒベルノ＝サクソン芸術やカロリング朝のフランコ＝サクソン写本といった、先行する時代の彩飾写本の装飾語彙を継承したものと言える。テキスタイル芸術からの着想が想定されるのは後者である。しかし、コルヴァイ写本には、現存する絹織物に類例が見出せるものだけではなく、織物や刺繍では技術上困難だろう模様も含まれる。従って、単にテキスタイルから借用したのみならず、充填模様は写本画として独自の発展を遂げていた可能性が示唆される。

コルヴァイ写本の充填模様の類例を、エッセン、ガンダースハイムといった、初期〜盛期中世に絹織物を所蔵していた近隣の修道院に由来するテキスタイルの例に求めたが、研究期間終了時点ではコルヴァイの画家が目にし得た明確な成果は得られていない。テキスタイルに類さない充填模様の例を考慮するならば、象牙や金属による工芸作品を含め、他のメディアとの比較も検討する必要もあるだろう。